

昔の暮らし聞き取り隊

聞き書き集③

平成26年3月発行

えい が
榮花 豊 さん

大正13年（1924年）9月11日生 89歳

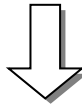
～シベリア抑留体験記～



喜茂別町教育委員会

「聞き書き」とは？

- ◇ 「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。
- ◇ 「聞き手」が「話し手」の方のお宅におじゃまして、お話をボイスレコーダーに録音します。
- ◇ 後でその録音を聞きながら、できるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。
- ◇ それを本人に、確認や修正をしてもらいます。
- ◇ 「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。



- ◎ 時代を共有したり、その人の経験から生きる知恵を学んだり、昔の暮らしを今に活かすことができるかもしれません。
- ◎ 地域を守り続けるため、お互いに助け合うことや支え合うことの大切さや楽しさを伝えてくれるかもしれません。

◎シベリア抑留とは・・・

第二次世界大戦終結時に、ソ連軍に武装解除された日本軍捕虜達を、シベリアで強制労働させたこと。その大部分は関東軍軍人であった。

ポツダム宣言では、日本軍隊の郷里への帰還を約束したが、ソ連は、シベリア、外蒙古、中央アジアなどの約 1,200 箇所の捕虜収容所に収容し、極寒の地で十分な食事も与えず、鉄道建設、採炭、土木建築など、苛烈な労働に従事させた。

60 万人以上の日本軍将兵、満州在住民間人、満蒙開拓団が抑留され、そのうち 6 万人以上が死亡したとされている。

一 私の生い立ち

私は、大正13年9月11日に留産で生まれて、小学校は喜茂別尋常小学校に通いました。

尋常小学校を卒業した後、奉公で東京の深川に行ったんです。

深川の材木問屋に住み込んで、日中は給仕きゅうじや材木を運ぶ仕事をして、夜は商業学校で簿記やそろばんを学ぶという生活を1年半続けたんですが、体調を悪くして親に呼び戻されました。

当時、深川の街には何百軒という材木問屋があって、そこに1軒に3人から5人位の人が、全国から住み込みで働いていましたね。特に四国の人が多かったですね。日中働いて疲れているから、授業中居眠りするということも、たまにありましたね。

喜茂別に帰ってからは、兄が兵隊に行くのもあって、家業の農業を手伝いました。

一 終戦の前の年に入隊して満州へ

昭和19年の7月頃、20歳のときに俱知安で徴兵検査を受けて、私は甲種合格でした。そして1ヶ月経った頃、喜茂別のお祭りの日に、私達の学年と1年後輩の人達全部で150人位、喜茂別からは20人位が選抜されたんです。

9月20日に旭川の第7師団歩兵第26連隊に現役入隊しました。けどそこには1週間位しかいなかったんです。その次に中国じゃむす（当時：中華民国）の佳木斯（中国黒竜江省の都市）に移動して、そこで新兵教育を受けました。新兵教育は3ヶ月間程でしたね。

新兵教育が終わっても後から入ってくる兵がいない。二等兵が新兵教育を終えたらすぐに一等兵でしたから。もうスターリンに進級させてもらったようなもんだなって、よく皆で話してました。

佳木斯は、ソ連との国境近くなので緊迫感がありましたね。

当時いた関東軍の部隊は、独立歩兵第 775 部隊や第 853 部隊という名前でした。それが国境警備で凄く優秀な部隊だったと聞きましたが、初年兵を残して台湾に行っちゃったんです。昭和 20 年の 1 月に。その後には初年兵とその補充のために現地動員された年齢の高い兵隊、病人みたいな弱い兵隊だけ残されていました。

朝鮮の優秀な初年兵が、徴兵制度だって言って日本の正規軍に沢山入れられてね。その歩兵達が昭和 20 年の 5 月に 1 週間に 1 度位外出したんです。そしたら、中国人や朝鮮人の集落の人達が、日本は負けるから帰るな帰るなってかばっちゃって。なんぼ捜索しても見つからなかったね。要するに脱走兵だね。外出する度に帰ってこなかった。5 月にはソ連の飛行機が越境してくることもあって、日本には制空権が無くなったのかと思いました。

慰安婦の問題があるんだけどね。業者がいて、ここからは軍人だとか日本人以外は入ったらいかんって区域があつてね。

実際のところ、朝鮮人だけでなく、志願して納得して来た日本人もいたんです。日本では生活できないから、どうせ死ぬなら太く短くって、国の為になんか少しでも喜んでもらえば命も惜しくないってね。内地（本州。北海道弁。）から、食べ物が無くて困ってた人とかが。軍属（軍人以外の軍所属者）の待遇だったんです。

その頃はまだ日本の憲兵だとか警察が結構力を持っていたから、不平不満はあつただろうけど、昭和 20 年の 3 月頃までは治安は良かったですね。

— 銃などの装備は貧弱だった

本当に古い、旧式の物しか無かったんです。

昭和20年の5月になったら貧弱でした。軍隊ではなく青年団の集まりでないかなっていうくらい、特攻隊に出るしかないような兵器しか無かったんですわ。全然無いってことはないんだけど、機関銃とか南方に抜かれたんでないだろうかって思う。

昭和20年の1月頃までは関東軍の精鋭部隊は結構いたけど、大量に南方に移動して、5月頃になったら50歳くらいの人達までが可愛そうなくらい招集されたんです。酷かったんです。

— 8月9日、地獄の日々が始まった

忘れもしない昭和20年8月9日。牡丹江（中国黒竜江省の都市）の近くにいるときです。ソ連軍が朝早く、空からは爆撃機が低空飛行でやってきて、地上からは戦車が多数攻めてきたんです。凄くびっくりして、満鉄に勤めている人とかみんな大混乱しちゃって。その当時5人位子供がいる人とか結構いたんだけど、子供の手を引っ張って、背中にもおぶって、お腹にいる人もいました。そして遠くから見たら、何百人という人が山の方に逃げていくのが見えてね。けどもう帰ってこれないの。ソ連の戦車があちこちにいっぱいいたから。

みんなすぐ家に戻れると思って荷物を置いたまま逃げてきたから、泥棒や空き巣が流行って、貴重品も全部盗られて。ソ連人よりも中国人がおこなっていたんです。

そして8月11日、ソ連の戦車150台が集結して通ったというその日、特攻を命じられて、重さ10kgの爆弾を風呂敷で体にくくりつけて、山の中の道沿いで戦車を待ち伏せしていたんです。そのとき、たまたま中国のお年寄りの男性が通ったんです。そし

たら上官が、作戦が漏れたらいけないって、そのとき私含めて9人位いたんですが、そのお年寄りを殺せと命令したんです。私らみんな黙ってうつむいていたら、上官がしびれを切らして、持ってたウイスキーを飲んで、お年寄りをひざまずかせて、軍刀で首を撥ねたんです。もう、あのときは寒気がしました。命乞いをするお年寄りの顔と声が今も忘れられないですね。

特攻を命じられたときはね、死を覚悟したから、恐怖を通り越して、体が軽くなった感じがしてたね。

結局そのときは、靴の中に雨水が溜まるくらい物凄い雨が降った影響で、ソ連の戦車隊に出くわさなかったんで、助かったんです。

私達の部隊は牡丹江という大事な拠点にありましたから、ソ連軍の侵攻が激しかったんです。戦車が150台集結して激しく攻撃を受けて、大隊長や中隊長も戦死されたんです。

後に東大の研究者も言ってましたが、大事な拠点だったんです。行方不明者の多い稀な部隊だったとも後から聞かされました。

一 邦人は難民となりました

もうね、とにかく一般の人が可愛そうだった。関東軍が何もしてくれなかったとか逃げたとかいって評判が悪かったんだけど、実際には何もできなかったんです。どこに行ってもソ連軍の戦車ばかりで、出たって殺されるから。

ソ連軍から攻撃を受けて逃げているとき、^{きょうはく}鏡泊湖っていう湖の近くで日本人の女性に会ったんですけど、顔が物凄く腫れてることに気が付いたんで、「誰かに殴られたんですか。」って聞いた

ら、「兵隊さん、正直に言いますが、私はソ連兵に強姦されました。」と言って、殴られて目が見えないくらい腫れた頬から涙を流していたんです。戦車に追われて、蜘蛛の巣も酷いし狼も出るという藪の中に入って1週間位迷って、その間にソ連兵に強姦されたようでした。その女性の友人は15、6人のソ連兵に強姦された上殺されたとも言っていました。当時私は21歳だったから、それまで強姦って言葉にピンときてなかったから、聞いたときは恐ろしくなって寒気が止まらなかった。人間は動物よりも劣るんでないかって思ったね。

両親がお金盗られて殺されたって言って泣いていた5年生の男の子もいたんだけどね、何もできなかった。何かしたくても何もしてあげられないんです。あの後どうなったかなあと、今でも心残りですね。

— 終戦は、すぐには分からなかった

終戦のことは知らなかったんです。

8月29日、この日は天気が良かったんです。道路に帯革（皮で作ったバンド）をしている人達がいたんです。「どうしたんですか。」って聞かれたので、「開拓団（①）の人から九州に神風が吹いて日本が勝利に終わったって聞いて元気が出た。」と話したら、「いやぁ冗談でない。私たちは無条件降伏でとっくに武装解除を受けて道路を直す作業をさせられている。」って聞いて、それで分かったんです。確か牡丹江上流の敦化とんかでしたね。それから、ソ連兵の警備が厳重になったんです。

※①満蒙開拓団まんもうかいたくだん：満州事変以降太平洋戦争までの期間に日本政府の国策によって推進された、中国大陸の旧満州、内モンゴ、華北に入植した日本人移民の総称。こ

の移住は、日本軍が日本海及び黄海の制空権・制海権を失った段階で停止。

— トウキョウダモイ

一般の人は持ち物を全て取られてね。兵隊は何も持ってなかったけどね。私もね、兄貴から貰った時計も、預金通帳もあの頃何十円、今の価値だったら結構な額だけど、荷物と一緒に持っていたんだけど、上官から「特攻隊に出るんだから何も要らん。体一つでいい。」って言われて置いたきり。書く物も無いから全部記憶だけでね。

ソ連軍の捕虜になって日本の軍人が集結しているところまで、夜通し歩かされてね。私らは足にマメができて、そして夜中は眠いから居眠りしながら歩くんです。そうすると後ろから銃で尻を叩かれるんです。もう着の身着のままだし、膝から血は出るし、足には6つも7つもマメができるし。本当にあんなに辛い、惨めなことはなかったね。その時は200人位いましたね。

捕虜になってトラックで輸送されるときに、「ざまあみろ！」っていう罵声が何か所からも聞こえるの。中国人も腹立ってるから。だからもう惨めだったんです。

そして、ソ連兵が集結して、小銃なんかを山のように積んでね。壕^{ごう}を掘って、そこに関東軍の兵隊が乞食^{こじき}のような格好させられて入っていたんです。一つの大きな街になるくらい。それから南満州鉄道で1,000人ずつで連れていかれたんです。

ソ連の軍人は、「ダモイ（帰国）、ダモイ」「トウキョウ、ダモイ」と言って国に帰すようなことを言っていました。始めは北に向かっていくんですけど、次に西にばかり行くんです。陽が昇る

のは東だから、東京から離れてるってわかるでしょ。西へ行っているのが分かったときは「もう駄目だな。」って思ったね。

もうね、やり方が汚いんですわ。哈爾濱（中国黒竜江省最大の都市）に大きな体育館があつて、被服から食糧から何でも詰め込んでいて、「何でも好きなものを取っていい。東京へ帰るんだから。」と騙すんです。「セーターとか何枚着てもいい。」と言うんです。そして、収容所まで行く間に何回も身体検査をして服を取っちゃうんです。お手洗いにも行けなくて、「どこでもその辺でしていい。」って言うんです。シベリア ② のバイカル湖 ③ の周りを何時間もかけてそうやって通ったんですわ。

※②シベリア : ロシア連邦の北アジア地域。冬季の気温は非常に低く、零下73度という人間が居住可能な場所における最低気温も記録。一方、夏季は30度以上まで気温が上昇する、いわゆる大陸性気候。特に、シベリア東部の内陸盆地では夏季は厳しい暑さとなることがあり、年間の温度差は極端に大きい。

③バイカル湖 : アジア最大の淡水湖で世界最古の古代湖。構造湖であり、最大水深が1,634m~1,741mと世界最深、貯水量も世界最大。世界最高の透明度を誇る。平成8年世界遺産に登録。

— 騙されてシベリアの収容所へ

最初に連れて行かれたのは、タイセット（ロシア連邦タイセット。バイカル湖から約400km離れた町。）でした。タイセットの収容所には1,000人位いました。

収容所へは貨車で移動させられて、お手洗いもなくて、みんな

貨車の僅かな隙間から用を足してたんです。

収容所の周りは同じような太さの木がいっぱい並んでるから、ちょっと中に入ったら方角がわからなくなるんです。もしも道に迷ったら、しばらくすると空に銃声が響くんです。それで迷った人は自分は罪人になるんだって、泣きながら戻る場所を探すんです。ソ連兵も、万が一日本人を1人逃がしたら、兵役が6年長くなるんです。何回もそういう話を聞きましたね。

私らは抵抗した部隊だったから、収容所の柵が嚴重でしたね。3m近くの高さの塀と有刺鉄線で三重になってて、きれいに草一本生えていない、足跡がついたらすぐ分かるように、見通しが良くなっているんです。四隅には自動小銃を持ったソ連の監視兵が見張っていました。脱走したら射殺すると書いてありました。

ソ連軍は、日本の憲兵とか特攻隊とか抵抗した部隊とかは分かたんじゃないですかね。憲兵と警察は、私らよりもまだ地下に入れられてね。仕事をさせないで警戒されてたね。

将校と兵隊は別々に入れられていたんです。点呼とかは同じところであるんですけど普段は別でしたね。将校と一緒に労働をしたことも無かったね。

その収容所の建物は、元々ドイツの兵隊が入れられていたらしいね。平屋建てなんだけど2段になっててね、天井は高いんですけど、上の段の人は立てるだけの高さが無いからずっと座ってるんです。

壁は泥壁だから南京虫(④)の巣になってて酷いんです。もう南京虫がぱらぱらと落ちてきて皮膚をやられて、何日も何日も痒くて痛痒いんです。

※④南京虫：とこじらみ床虱の別名。カメムシ目トコジラミ科。吸血性の

寄生昆虫で、成虫は5～7mm。刺咬する際、宿主の体内に注入する唾液の中に含まれる物質が引き起こすアレルギー反応で激しい痒みが生じる。痒みは刺された当日よりも2日目以降の方が強く、刺咬の痕跡は1～2週間以上消えない。

— 過酷なノルマ

収容所には作業隊と警備隊っていう管理部隊があつて、作業隊長は楽でないんですわ。仕事上の責任があつて。警備隊は現役のソ連の軍人なんです。作業隊はかつてドイツに降参した人達で、階級章はついてるんだけど兵器は持ってないの。

作業隊と警備隊はいつも意見が合わなかったね。警備隊は時間がきたら帰るって言うし、作業隊はノルマに到達するまで帰らないって言うし。ノルマに達しなくても罪滅ぼしの意識があるから。作業隊の人達は可愛そうなくらい上からの圧力がかかってたね。

私たちは個々にノルマはあつたんだけど、みんな体力が無くて半分もいけなかったね。日本人はそういうものをわきまえているから、ノルマをこなせない人を責めるとかそういうことは無かつたけどね。

無理なノルマもきて、側溝でも何m掘れって言われて、私も若かったから手伝うんだけど、しばれてて硬いんですわ。あるとき、ツルハシで掘ってたら後ろの人が私の尻をツルハシの先で叩いちやって、何も痛くなかつたんだけど、出血が酷くて靴の中にジャブジャブって溜まって、そしたらソ連兵がすぐ飛んできて医務室に連れてかれて、1ヶ月位公症ってことでゆっくり休めたね。

作業内容は、鉄道の線路建設だね。丸太を敷き詰めるの。日本人は器用だから、斧で上手に彫って上手く組み合わせていくんで

すよ。

一輪車も鉄を焼いて作る場所から始めて、3年目には線路が通ってね。枕木は新しいんだけどレールが日本のマークが入ったのが結構あったね。

ソ連軍には、日本に帰す帰すって嘘つかれて、何回騙されたか。帰すって言うては次の収容所へ行くから。作業区域はあるんだけど、大勢入れても作業ははかどらないから。結構人数が入ってたんです。したからひとつの区域で鉄道作るっていても、3年でやっと。私らが日本に帰れるときに乗ってきたところが何百 km あったのかな。最初に収容所に行くときはソ連側が作った新しい鉄道に乗せてくれたんです。そういうときは大っぴらには見せてくれなかったけど、帰るときには貨車のドアを開けてくれて、見ろってね。

連れて行かれるときは、こっちもどんなことされるか分かんと思ってるから乱暴で警備も嚴重だったけど、収容所に着いてからはそうでもなかったですよ。

ソ連ではあんまり教育すると自分の国が嫌になるから、一般人にはあまり教育させたくないんだって言ってました。オリンピック選手とか学者とか優秀な人は国で全部面倒を見てきちんと教育させるようだけど。

そうやって聞いてたから、1年位過ぎたあるとき、20人位で作業していたら、私はロシア語は分かんけど、分かる人の話したと、ソ連兵が「日本の外交は下手だ。松岡さん（松岡洋右外務大臣）よりまともな人がソ連にはいる。モロトフ外務大臣は世界一だ。100年先のことを考えている。」って、6年しか学校に通ってない人がそういうことを言ってるわけ。もう70年近く経って

るのにそれが忘れられないね。

— 収容所では人間としての誇りや価値が無視された

被服は取り替えてくれたの。1,000人の中に洋服屋さんとか仕立屋さんとかの特技を持ってる人とか、縫製してくれる人がいたんです。足りなくなったら、ソ連の服とか中国の服とか着てましたね。

もうね、最初収容所に入れられたときは、みんな無気力になってるから喧嘩するだけの力もないんですわ。もうどうなってもいいわっちゅう気持ちになってね、モノ言わない生き物みたいなもんでね、哀れなもんですよ。ただ、「どうしてここへ連れてこられたのか」ということばかり考えて。人間扱いではないですから。罪深いとか自分を責めてね。

— 飢えに耐えて

食事は、最初は関東軍が持っていた米とかを取って食べてたね。米と言っても、玄米でゴった煮だから何時間も炊かないと硬くて消化に悪くて食べられないの。ゴった煮も、酷いときだと6～7種類の食料を混ぜて出してくるから、もう豚の餌みたいなもんでね。缶詰の缶1杯位の少量でも腹が減ってるから美味しいんですわ。

パンもくれるんだけど、黒パンで小麦だけでなく大麦とか色々な物入ってたんだろうね、口の中が噛み切れないだけのカスでいっぱいになるんですわ。

いつも「これの3倍食べたら食べた気がするんだがなあ。」って思ってたね。あまり腹が減ると寝られないの。眠たいのに寝られ

ないの。

私は農家の生まれだから骨は太いし、粗食にも耐えることができたけどね、学者だとか重労働してない人達は体力が無くてもたなかったね。栄養も吸収できないしね。結構病気になる人もいたし、亡くなる人もいたね。向こうも粗末にできないから、大きな病院に連れてってくれるんですわ。それでも結果的に1割近くの人が亡くなったと聞きましたけどね。

日本人に食べさせなかったって言われているけど、実際のところ、ソ連も最低限度のレベルから更に落とさないと生きていけないくらい食べ物が無かったらしいんですわ。ドイツにやっとなんと勝てたくらいだから自分達もゆるくなかったって言ってましたね。

— お坊さんの言葉に救われる

収容所ではお寺さんにも3人位ご縁があって、中でも福井県のえいへいじ永平寺のやまぐちえいげん山口榮善さんというお坊さんに、「私、特別悪いことしたわけでもないのにどうしてこんな所まで連れてこられたんだろう。」って言ったたら、「榮花さん、あなたは生まれた時からここに来なければならぬ運命だったんだ。目に見えないものを大切に
する人間になりなさい。」と諭されましたね。

お坊さんは現地から招集された方で、おそらく布教とかそう
いったことで来ていたんだろうね。

— シベリアは極寒の地

零下40度になったら火は青く燃えるんです。乾燥した良く燃える薪でも赤く燃えないんです。火の燃えている前側は暖かいんですけど後ろの方は氷を背負ったように寒いんです。だから焼ける

くらい前に近づかないと寒くてしょうがないんです。零下30度でもかなり寒いんですけどね。

外での作業は零下30度で中止になるんです。だから冬はほとんど仕事はできないんです。雪は少ないんですけどね。

夏はわりと楽なんです。けど、どこに行っても同じ景色ですから、何も楽しくなかったですね。

— シベリアは流刑地

私らには聞かせないようにしていたのかもしれないけど、自殺する人はほとんど聞いてないね。私が知ってる限りでは1人位しかいなかったですね。

食糧を盗んで殺されそうになった人はいたけどね。食糧を石油缶とかの缶コに入れてあって、食事の係に当たった人が受け取りに行くと、見つからないように盗ろうとしたんだね。それが同じ日本人に見つかって、「貴様、自分さえ良かったらいいのか。」って。そういうのは見たことあったね。やっぱり食べ物は命に関わるからね、そういうことをすればね、片一方は腹が空いてるから、食べたくて食べたくて余裕も無いから。叩かれた方も仕方が無いところもあるんですけどね。

脱走して可愛そうな人がいたんです。その人は、シベリアに連行される途中、水を補給するってことで、田舎の駅で停車したときに、汽車の底に掴まって逃げたんだけど見つかって、シベリアについてから見せしめで連れて来られたんです。もうね、腕とかに銃で撃たれて大きな傷ができて、それが腐ってグジュグジュになって、蛆うじが湧いててね。

シベリアはソ連国内でも囚人が行く所だから、例え逃げても必ず捕まえられるように道路が作られているんです。だから絶対に逃げられないんです。ソ連の人に言わせたら「シベリアは人間の住むところではない。ブヨと囚人の住む所だ。国語の教科書にも載ってる。」って。

— 途中で少しずつ帰国する人が・・・

ソ連の言葉でハラシラボウタってね。仕事の技術が良くてノルマの達成度の高い人は名前をちゃんと記録されてて、1年位早く帰れてたね。

そのうちに手紙も出せるようになったんです。私も母親に出して1年半位経った頃返事が来たんです。みんなそんなの出しても日本に着くわけがないって言って本気にはしなかったけど、返事が来たんです。もちろん検閲があるからまずいことは書けませんでしたけどね。

— 収容所内での民主運動

「日本は飢餓とインフレで、食べ物が無くて飢え死にした人がいるんだ。」って、そういうような写真を見せられました。「あなた方の帰りを待ってる人なんか誰もいない。」って書いてるんです。だから、共産主義を勉強して、その精神で帰れっていうような政治教育がありましたね。

その中でも積極的になる人は、結構待遇が良くなってましたね。食糧も困ることがなく。そういう人もいましたよ。みんな無気力だから、それに対して反感を持ったり言い返したりっていう人はいなかったですね。ただ、待遇は良かったのに帰りは遅かったね。

残務整理とか色んな名目付けてね。一緒に帰った人は少なかった。

『日本しんぶん (⑤)』という新聞もありましたよ。回ってくるんで私も読んだことがあります。ただ、部数が少ないんですよ。それには「あんた達の帰りを待ってる人は誰もいない。」って、大きく出てるんです。

もう、みんな元気が無かったから、そういったことに盛り上がらなかったね。ソ連の言ってることはもっともだって。そこまでの気持ちになれなかったね。やっぱり空腹の方が先だからね。

※⑤日本しんぶん：ソ連によるシベリア抑留時に発行された日本人向け新聞。初期は『日本新聞』。昭和 22 年当時、ソ連国内の日本人収容所で民主運動が盛んな時期だったため、『日本しんぶん』が民主運動と連動して、日本批判とソ連への賛美など一連の政治キャンペーンを張ったと言われる。日本しんぶんを批判すると、場合によっては一般収容所から数段階厳しい強制労働収容所に送致された。

一 絶望感の中で

やっぱり自分を責めていたね。こんな目にあうんだから罪深く生まれてきたんだとかね。

もう“死”ということが、恐怖ではなくなってたね。あそこまで行くと。自分の死は苦にならんね。それに軍人教育の徹底もあったから。「恥を知れ」とか「死は髪の毛より軽いと思え」とかね。

けどね、日本全体が負けたから肩身が広いけど、自分達だけ

だったらって、いつも思ってるの。情けない行動とったら恥ずかしいって。国全体が負けて助けられたね。

あのような状況になると、隠し事とかしないで全部正直に話してしまうの。ある人なんかは、「私は神戸の凄^い財閥に生まれたけど、女や酒にお金使^{って}使^{って}勘当^{かんどう}されて、室蘭に鉄道^{どかた}の土方に連れてこられて、タコ部屋に入れられて、足に鎖をつながれて強制労働させられてた。そういう男なんだ。」って。自分のことを全部正直に話してしまうんです。もうドン底だから、そうやって自分のことを正直に話す人は結構いたね。もしかしたら、明日命が無いかもしれないから。何も恥じも外聞も無いから。ただ、どこかに人間としての誇りを持ちたいんだよね。人間としてやってはいけないこと、やらなければならないこととか、そういうのは今のどこかに感じてましたね。

一 「国に帰りたい」の一言のみ

昭和23年の1月です。そのとき、私、栄養失調が元で38度位の熱が1ヶ月位続いてたんですわ。レントゲンも何も無い所にただずーっといたの。その間に目が失明してたようなんだけど、それが分からなかったの。そして、国に連絡しなさいってことで、葉書を貰って書こうとしたら、なんか字が真っ直ぐ書けない。帰国してから眼科へ行ったら、栄養失調が原因で左目が失明してるって言われたんです。

本当は、熱が37度以上あったら仕事を休ませてくれることになっているんだけど、実際はそれ位では休ませてくれないんです。38度以上でなかったら。熱が下がったら、20人位の部屋に入れられて、あと何日ももたないって人の世話をしなければならな

いの。かわいそうなを人何人か送ってあげた。みんな同じことを、「もう一度日本の土を踏みたかった。」って言ってました。

大学を出ていた立派な人も、「榮花さん、もう一度日本の土を踏んで死にたかった。」と言って、痩せ細ってるのにとめどなく涙を流すんです。教育を受けていてしかも心が綺麗なの。ドン底の中でも綺麗な心になるってのは難しいですよ。

一 ナホトカから舞鶴港へ

帰れるって話を聞いて、「日本しんぶん」にもそれが載ったんだけど、みんな本気にしなくて、また騙してるって思った。

しかし昭和23年6月3日だったと思います。ソ連のナホトカを船で出発して国に帰れることになったんです。ソ連は広いからナホトカまでも結構かかったね。ナホトカまでの移動中、体の調子が悪くても少しくらい熱があっても、みんな子供のようにはしゃいでたね。夢のようだった。

収容されていた3年間は本当に長かったですよ。もう10年位に感じていましたね。

ソ連兵は、日本から奪った色んな物を見せびらかして、「日本にこういう物はないだろ。」って威張ってね。幼稚なところがあつた。引揚船(⑥)も、高砂丸っていう客船で赤十字のマークも着けるのに、「これは日本の船じゃないだろ。」って軽蔑して言ってたね。十分な教育を受けていないから、そういうことも分からない兵隊が多かったね。

※⑥引揚船：復員輸送艦。太平洋戦争終結後、海外に残された日本人を本土に帰還させるために使用された艦船。

ナホトカには2～3日いて、身体検査を受けました。みんな日本しんぶんを持って帰りたくて隠してたんだけど、見つかって没収されてたね。

日本人を帰すことが決まっていたから、ソ連の兵隊は乱暴はしなかったですよ。

ソ連兵の監視は港まで、船に乗ったら日本のお医者さんや看護婦さんがいて、長い間ご苦労様でしたって、声かけられて涙が出ました。もう安心して緊張の糸が切れたんだね。夢のようでしたよ。不思議なこともあるんだなと思いましたね。

高砂丸は2,000人以上が乗っていましたね。大きくて立派な船でしたよ。

舞鶴に着いても3日位おったね。そのあと伊豆の湊海軍病院に転送されたの。終戦後の日本だから、そこでも食べ物が無いんです。だからお粥が貰えたら最高だった。みんな親切にしてもらってね。それから伊達に着いたんです。

本当は国立病院に入れば無料で治療させてもらえたんだけど、戦後の初代の喜茂別町長の菊地さんが、わざわざ国立病院に行かなくても、国のために戦争に行ってきたんだから、伊達赤十字病院でお金がかからないようにと、手立てをしてくださったんです。

— 真っ直ぐに生きて・・・

深く考えれば“自分で納得できる試練”だったと思います。

人に良く思われたいとか、そういう気持ちが全然無く生きてきたから、シベリアでもどこでも、大きな喧嘩や争いは一度も無かったんです。褒められもしないけど迷惑もかけてないって。真っ直ぐな道をつて。僻^{ひが}み根性を持ってても何も良いこと無い。意

地悪された人には特別深く付き合わないようになっている。そうしたら、罪をつくらなくても良いから。

私は言い訳をしない人間だから、軍隊にいたときも、周りから頭が悪く見えたみたいで、誤解されてたようだけど。だから、この人は悪い人じゃないって思えば長くお付き合いさせてもらおうし、意地悪された人とは付き合わない。交際しなければ喧嘩することもないしね。

戦争体験の話も、いつも損していると思うんだけどね。「榮花さん、自分で新聞社に投稿したのか。榮花さんも苦労しているかも知れないけど、私だって苦労してるんだ。」って家まで言いに来た人がいたんです。そのときは「自分から新聞社や教育委員会に載せてくれって言ったことは1回も無いんですよ。話を聴かせてほしいって言われて、参考までにお話ししたことがあるくらいですよ。」とお話ししましたけどね。倶知安の新聞社の方も「後志管内でも色んな方からお話しを聴いたけど、みんな戦争体験は団体での行動ばかりで、特攻だとかの個人の行動はない。蘭越にもいるけど、団体での行動だから参考になることはない。」と。それで「喜茂別の榮花の所に聴きに行け。あいつはシベリアに行ってきたから。」っておっしゃってましたね。

— 「知足」(⑦) ということ

京極に藤波小浪さんって、私の同級生がいるんですけど、京極の社会福祉協議会に榮花の体験談を聴いてもらいたいって話してくれたみたいで、去年の8月に戦争体験のお話しをさせていただく場を作ってくれたんです。それでこういう形で体験記を書いて、「知足」という心を持って生きることの大切さについてもお話し

をさせてもらったんです。1時間という短い時間だったからなんぼもお話することができなかつたけどね。

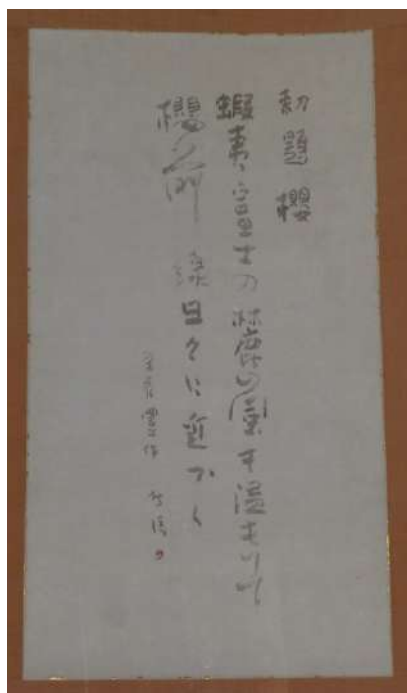
※⑦知足 : “足るを知る”。禅宗など、人間の欲を戒めるため、よくこの言葉を引用。「十分に満ち足りていることを知り、不足感を持たない。」という意味。

— ふるさとを思つて

短歌を始めたのは昭和53年位だから短いんです。始めて間もなく昭和55年の歌会始(⑧)の選歌に選ばれたんです。

あれは、羊蹄山に助けられたと思つてるんです。

私の従兄弟で、留産の石川満さんと富田嘉幸さんの二人が昭和55年の1月にお祝い来てくれたんです。そのときに、「豊さん、あの歌はとても良い歌だけど、羊蹄山を蝦夷富士と読んだから選ばれたんだよ。九州の人でも沖縄の人でも蝦夷と聞けば北海道と分かるから、蝦夷富士って聞くと大きさが伝わるけど、羊蹄山だと知名度が無いから選ばれなかつた。」つて言ってくれたんです。



書：中野北溟
〈農村環境改善センター〉

歌会始に招聘されて東京に行ったときにも、選者の方が“蝦夷富士の麓の風も温もりで”のところがスケールが大きく、北国の人が春を待つ気持ちが出ていて良いつて言ってくれました。

※⑧歌会始 : 年頭に皇居で行われる「歌会始の儀」。例年、一定の題に従い国民から詠進歌を募集。選者によって選出された選歌（10首）の詠進者は皇居に招聘され、歌会始の儀で詠進歌が読み上げられる。注目を浴びる宮中行事の一つ。

あの歌には、シベリアのことも頭にありましたね。抑留生活の間、羊蹄山がすぐそこまで見えるところまで来ているのに、後ろにソ連兵が自動小銃を持って立ってるっていう夢を何度も見たんです。

お題が「桜」だったから、通常2万首位の応募のところ、3万首の応募があったそうです。みんな桜に対する関心と親しみがあったんですね。その中で選ばれたんだから、やっぱり運が良かったんですね。人生には不思議なことがありますね。

かつての戦友達も東京の原宿でお祝いしてくれました。とてもありがたかったですね。

一 私が伝えたいこと

戦争っていうのは恐ろしいもので、勝っても負けてもやるべきでない。やっても何にも良いことは残らない。本当の殺し合いだから。自分は人を傷付けたとかそういうことは無かったけど、軍隊に入ってたから連帯責任だよな。

戦争は、罪の無い人が巻き込まれるんです。いつも巻き込まれるのは女性や子供、お年寄りとかの弱い立場の人なんです。本当に地獄なんです。あのときに亡くなった人のことを考えると、今でも涙が出るし、申し訳ないって思います。

若い人には特に、戦争のことは分からないだろうから、一人でも多く知ってほしいと。戦争は絶対にしない世の中にしてほしいと。それだけなんです。

戦争で犠牲になった沢山の人の御加護があるからこそ、今の平和な日本があると思うんです。ですから、「平和の尊さ」と「命の重み」というのを、今一度真剣に考えてほしいですね。それと、「人を思いやる心」を持ってほしいですね。

これが戦争体験を通じて、私が伝えたいことですね。

「昭和55年歌会始の儀」選歌

えぞふじ ふもと かぜ ぬくも さくらぜんせんひび ちか
蝦夷富士の麓の風も温りて桜前線日々近づく

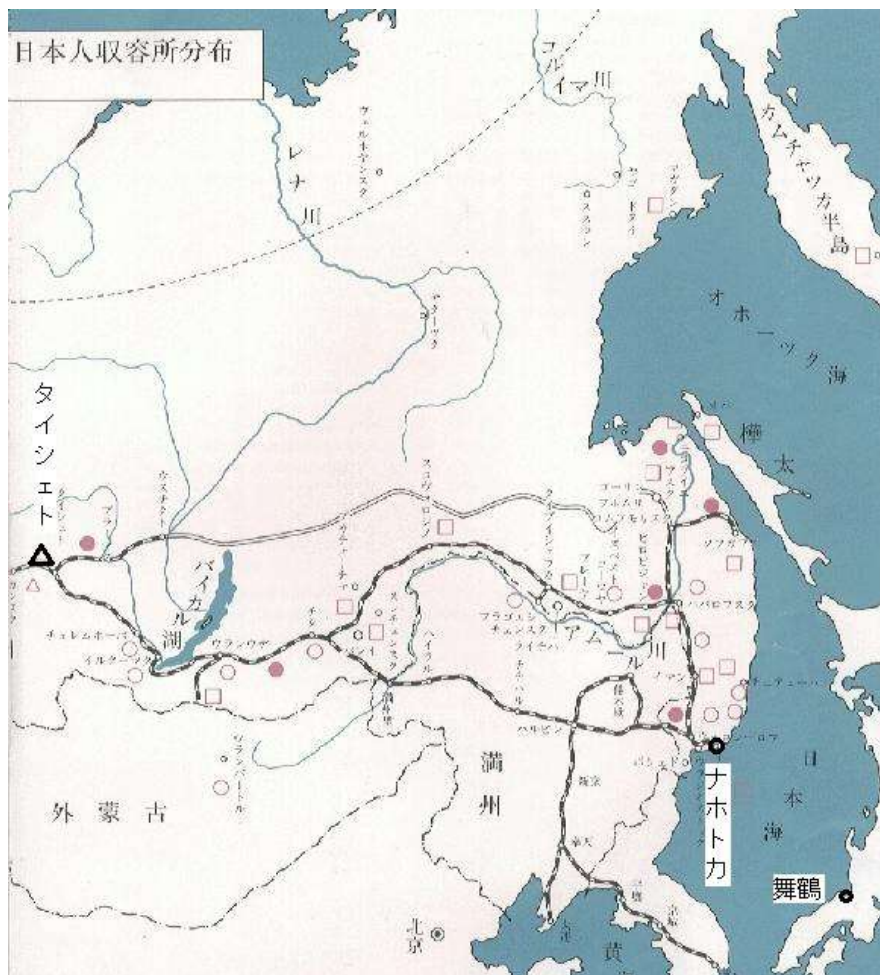
「生命の重み」(平成25年8月京極町社会福祉協議会主催の語り部の際に披露された短歌)

戦争を知らぬ^{こたち}子等よ平和なる今の幸^{しあわせ}福いかに見るらむ
敗戦に生命^{いのち}拾ひてながらへる今あるわれの生きざまを問ふ
戦没者追悼式につつしみて平和に生きる今の幸^{しあわせ}福
戦争の終わりて六十五年なり生命^{いのち}捧げし御^{みたま}霊を思ふ
村祭りまためぐり来て浮かびたり^{いくさ}戦に行きし遠き日の朝
シベリアのきびしき抑留思ひつつ拉致されし人の悲しみを聞く
シベリアに抑留の日々空腹に眠れぬ夜の遠き日の夢
戦争はしてはならぬと思へるにテロに兵器を売る国のあり
シベリアに抑留のまま^ゆ逝^{とも}きし戦友北方領土をいかに見るらむ
国の為^{いのち}生命^{とも}捧げし戦友偲び生きて残れるわが胸に問ふ
戦争に生命^{いのち}を軽く見られしに平和は生命^{いのち}を重く受けつぐ
遠き日の異国の丘に見し月を今宵十五夜重ね見てをり
日の丸の旗には何の罪なきに国旗をかかげる人の少なさ
シベリアに抑留のまま^ゆ逝^{とも}きし戦友^{いのち}生命の重み語ることなく



歌碑の前で談笑する
榮花さん（右）と書家・加藤 幸道さん
〈ホッとパークきもべつ〉

◎シベリア抑留者の収容所



◎対日参戦時(昭和20年8月9日)におけるソ連軍の配置



(資料:志村英盛作成)

◆ ソ連軍の兵力

兵員 1,577,725 人、火砲 26,137 門(迫撃砲含む)、戦車・自走砲 5,556 両、航空機 3,446 機(海軍の装備を考慮しない数)

◆ 日本軍(関東軍)の兵力

兵員約 70 万人(詳細不明)、火砲約 1,000 門(歩兵砲・山砲など全てを含む)、戦車約 200 両、航空機約 350 機(うち戦闘機 65 機。練習機なども含む)

(資料:Wikipedia)



人と自然がきらめく町

きもべつ